

【第123回 定期講演会 講演録】

日時：平成18年10月31日

場所：発明会館ホール

平成18年度 土地月間記念講演会

「魅力あるまちづくりのための土地有効活用」

平成18年度土地活用モデル大賞（国土交通大臣賞）受賞 彦根四番町スクエアのまちづくり

彦根市都市建設部・都市計画課
寺田 修

滋賀県彦根市都市計画課の寺田でございます。この度は大変栄えある賞をいただくことになりました。彦根四番町スクエアのまちづくりに関係する5つの団体から応募させていただいたものでございますが、改めてお礼を申し上げたいと思います。しかしこれからは、このまちが出来て管理の時代に入ってまいります、このような賞をいただくということは、これからは皆様の注目を浴びるということになり、厳しいご批評をいただきながらのまちの管理運営になるというような、ある種の恐れのようなものを感じております。従いまして、これからのまちの運営に際しましては、関係者一同、意を新たに今後に取り組んでまいりたいと思っております。

さて今日は、私共四番町スクエアのまちづくりについて、その概要をご紹介するという機会をいただきました。30分程度という時間をいただいておりますが、用意した資料を全てご説明することが時間の関係でできません。途中割愛させていただくことになるかもわかりませんが、ご了承をいただきたいと思います。

四番町スクエアはこのようなまちでございます。石畳や脱色舗装のような公共空間、水辺のせせらぎ、緑、街路樹、街灯等が随所に配置され、ファサードを統一したまち。まちの景観に取り組み、そして、賑わい空間の仕掛けづくりとして、このような広場や中核施設等ができました。このように、彦根市の中心市街地商店街でありながら、全く新しい綺麗なまちができたものでございます。実は、元はこのようなまちでありました。彦根の市場商店街は、地方都市の空洞化した中心市街地商店街の典型的な地であるというふうに言われておりました。

最初に彦根市についてのご紹介をいたしたいと存じま

す。彦根はこんなまちでございます。琵琶湖の東部にありまして、ほぼ日本列島の真ん中、JR東海道線では名古屋と大阪のほぼ中間点にあたります。そして隣には、北陸道との結節であります米原市がございます。その北側には長浜市、また、彦根の南の方には近江八幡市がありますが、まちづくりで成功された事例として長浜や近江八幡は、近年全国のまちづくり関係者の脚光を浴びているところでございます。

滋賀の名物である近江牛は実は、彦根がその発祥であり、江戸時代に彦根ブランドである彦根牛を彦根藩が幕府に毎年献上していたことが端を発しているというふうには彦根の人は信じております。鮎ずしは当然琵琶湖の名産であり、彦根にも多くの鮎ずしを扱うお店があります。びわこ鳥人間大会は彦根で行っておりますが、彦根の中心市街地のごく間近で開催しているということはあまりよく知られておりません。この機会に、ぜひこのことも知っていただきたいと存じます。

やはり、彦根はこの国宝天守閣を擁する彦根城で有名でございます。琵琶湖八景の一つに謳われております彦根城へは、年間約50万人の観光客がお出でになられます。この彦根城は、世界文化遺産の暫定リストに上がっております。実は、平成5年に姫路城らが世界遺産に登録された時から、彦根城はその暫定リストに登録されており、未だに暫定リストのままであることから、なんとか世界遺産への実現を進めていこうというのが彦根市民の共通の思いであります。彦根城を取り巻く城下町エリア一帯を、近世の城郭都市という視点で世界遺産を目指そうというものでございます。

さて、四番町スクエアはこのような位置でございます。彦根城の近くであり、そして彦根駅からは約1.5キロメートルと若干遠い、中心市街地の商店街が連続してある

中にごさいます。中心市街地エリアの地図を重ねて見ますと、このような図となります。彦根の中心市街地は、彦根城の城下町として賑わっていた区域がそのままシフトしたものでござさいますが、城下町特有の条件といたしまして、道幅が狭く、我々は「どん付き」と呼んでいるような曲がりくねった道が随所にあります。当然のことながら、車社会には不向きなことになり、現代社会になかなか適応できず、若者世代を中心に人口流出が起っておりま。まの空洞化は非常に顕著なものがござさいます。そのような中で、この四番町スクエア、元の市場商店街は、空洞化した中心市街地商店街エリアの中でも最も空洞化が進んだ商店街でござさいました。

彦根の中心市街地の実態を少しご紹介いたしますが、彦根の人口が約11万人、今110900人ぐらいでござさいます。毎年、微増の状況でござさいます、ここ暫くはこのまま、増え続ける状況が続くであろうと言われております。ところが中心市街地の人口は、このように激減をしております。昭和40年代には1万5000人を数えておりました。現在は9000人余りでござさいます。この表は、四番町スクエアが属する城西小学校という小学校区の入学生の子供の数の統計を取ったものでござさいます。昭和30年代の子供の数は200人を越しておりました。現在は40名であります。これだけ子供の数が減っているということからもお分かりのように、高齢化率が30%を越しているという、市域で最も高齢化が進んだ地域でもありません。

そこで私共彦根市では、平成10年度に中活法に基づいた中心市街地活性化基本計画を策定いたしました。そこでの目標は「美しいまちづくり」でござさいます。今日の資料の副題になっております「みわくのまちづくり」は、この中心市街地活性化基本計画の標題に挙がっているところでもござさいます。もう一つの大きなキーワードは、「街なか観光」であります。これは、今彦根城へは年間50万人の観光客がお越しになるものの、そのほとんどは、京都・奈良に行くついでに彦根城に立ち寄るとい、「立寄り型観光」であります。

滞在時間が非常に短く、彦根城の一点型観光であり、所謂お金の落ちない観光都市の側面を持つておることから、これを城下町エリアの方に、まちなかの商店街の方に観光客等の人の流れを誘導するような施策を、いろいろな事業を通じて一連の取組としてやっいていこうとするのが「街なか観光施策」であります。後ほど詳しくご紹介をいたしますが、夢京橋キャスルロードというまちが四番町スクエアの隣りに出来ま。そこには彦根城からの多くのお客さんが流れるようになりました。

当初は「観光」という視点はあまり持っていなかったのですが、彦根城に訪れた人のほとんどが夢京橋キャスルロードにもお出でになるということになりました。この人の流れを四番町スクエアへと繋いでいき、更に中心市街地の他の商店街のエリアにも誘導していこう、そして、観光の基軸ルートというものをつくっいていこう、そしてそのための施策として、私共都市計画課が中心となる都市基盤整備事業と、商工課を中心に中小小売商業の活性化施策の事業を同時にやっいていこうとするものです。

具体的に申しますと、国交省の事業と経産省の事業を、できるものを全部このエリアに入れ込んできて、それで全体のまちづくりという構想を組み立てていこうとするものであり、これが私共の中心市街地活性化の基本的な方針としておるところでござさいます。このシートのように、「彦根城下町アーバン・ツーリズム」と称しているところでもござさいます。この中で、ゾーニングごとに個別の事業構想を練り上げ、官民が一体となったまちづくりに取り組んで行こうとするものでござさいます。

四番町スクエアはこの位置にありますが、このまちは、地域の方々、住民の方々がまちづくり活動を熱心に進められ、その成果として先ほど見ていただいたようなまちができたものでござさいます。このまちづくり活動を始める契機となったのが、隣の夢京橋キャスルロードの活動でした。これもこの地域の方々の非常に熱心なまちづくり活動の成果で、綺麗なまちができたものでござさいますが、四番町スクエアの内容をご説明する前に、若干それについて触れさせていただきます。キャスルロードはこのようなまちでござさいます。

街路事業で道路を拡幅するにあたって、両側のファサード、建物の景観を統一しようということがまとなり、建物移転に際して新しいまちなみを作り上げようとするものでござさいます。以前のまちはこのようなものでありま。行き交う人はほとんどなく、車の対抗もまならない、商店街も名前だけでほとんど機能していない、というもので。道幅が5.6mであったものを18mに拡幅する街路事業を基幹として、修景歩道や電線の地中化等他の事業を組み合わせる中で、地域のまちづくりとして沿線のまちなみを「江戸町屋風」に統一をいたしました。これは、沿線の建物が全て移転の対象となることから、彦根城の表玄関にふさわしい新しい商店街をつくることになったものでござさいます。

そこには、住民の方々のたいへん熱いまちづくり活動の苦勞話でござさいます。それは、景観統一のための手段として地区計画という規制誘導措置を用いることにした

のですが、その当時、昭和50年代末から60年代当初の時代は、今ほどまちの景観という概念が浸透していない時代でした。「こんなイメージの純和風のまちにするため、地区計画を設定します。」ということ在地権者との対話集会の中で提案をしても、「固有財産の侵害だ。」との厳しい反対の声があがるばかりで、旨く進みませんでした。もう止めようという声が上がったときに、救世主が現れました。地域代表の方の中に非常に熱心な方がおられ、「まちの将来を考えると、やはりこの計画を進めるべきだ。」と一生懸命におっしゃられました。その方が中心となって、地域住民のまちづくり活動として取組が始まりました。それを進める組織が、右側にごさいますような、「本町まちなみ委員会」でごさいます。

これは、任意の組織であります、地権者の方が地区計画案に合意できるような説明と話し合いをするということを目的とされ、その方が委員長となり、ほぼ2年の間、毎晩委員長さんのお家で地権者との話し合いが続けられました。その結果全員の賛同を集めることができ、それで大威張りで地区計画が設定できたというものでごさいます。そして、このまちなみ委員会では、地権者との話し合いを通じて多くの意見がでてきましたが、これを、左側の方の組織「まちなみづくり検討委員会」これは計画づくりとして地区計画を定める機関ですが、そちらの方にその意見をフィードバックする必要がでてまいりました。

このようなキャッチボールを経て、その結果地区計画案の修正も何回かやってきましたが、ようやく皆さんの合意が出来たというようなものでごさいます。自治体を始め非常に多くのところから、まちづくりの成功事例ということで賞讃をいただくことになりました。これの大きな要因は、一番下に書いておりますように、「まちづくりへの熱意」が高かったからであると思っております。地元キーパーソンがいて、多くの方の助けがあつて、進められてきたものであります。私は、地元「まちづくりバカ」と呼ばれるようなキーパーソンの存在が非常に大きなウエイトをしめているかなと思っております。

もう一度四番町スクエアに戻りますが、このような位置でごさいます。キャッスルロードの隣りにあり、非常に空洞化した商店街であり、空き店舗が目立ち、過小宅地が多く、木造老朽建築物が多く、防災上も非常に改善の必要が迫られている、このような地域でごさいます。商店主の方も高齢化が進んでおり、後継者がいないため積極的な販促活動ができない。不在地主の方、いわゆる空き店舗にされている土地建物所有者の方は、売却もしくは長期貸付、つまり自己利用はしないという意向の方

が非常に多い。こういうようなまちでごさいます。色の付いているところは所謂低未利用地、空き店舗、空き地のところでごさいます。約7割がそのような低未利用地でありました。

この四番町スクエア、元の市場商店街のまちづくり活動が今日の本題であります、実は過去にまちづくりをめぐるの紆余曲折がごさいました。昭和の末期から平成の初めにかけて、再開発事業をやろう、再開発ビルを建ててその処分床に商店主の方に入っただき、それでまちづくりをやろうよと、こういうふうな活動をした時期がごさいました。いろんな原因がございましたが、結局はそれが計画破綻となり、再開発計画は見事に潰れてしまい、平成8年には完全に撤退をせざるを得なくなりました。この平成8年というと、隣のキャッスルロードは、新しいまちがどんどん出来つつある時であります。活気あふれ、未来に向かって色々議論をされているキャッスルロードのまちを横目で見ながら、この市場商店街、四番町スクエアの皆さんは、もううちの所は何も出来ない、店が消えるまちと書いて消店街と読ませるように、まちには諦めのムードが漂っていた時期でごさいました。

そのような中で、「何とかしなきゃあかん、このままではゴーストタウンになってしまう。自分達のまちは自分達で何とか立ち上げよう。」というふうな思われたのが、地域の若手商店主の皆さんであります。この方たちは、再開発事業の役員であった方たちよりも一世代若い世代の方たちであります、まちづくりの議論を重ねるうちに組織を作ろうということになり、「檄の会」と申しますが、この檄の会によって組織的なまちづくり活動を始められることになりました。

まちづくりには全く経験のない方ばかりでしたので、まず始めたことは全国のまちづくりの成功事例を一生懸命勉強することでした。そして、わがまちにも取り入れられそうなことは、先方に出かけていって、そのノウハウを聞き、そのやり方を盗み出す、ということを繰り返しました。平成8年の末頃からその活動が始まりましたが、そうこうするうちに、檄の会にはいろんな応援団が現れることになりました。地元の建築家や大学の先生、もちろん行政の担当者も一生懸命バックアップすることになりました。この檄の会の活動が、今完成した四番町スクエアのすべての礎となっております。

平成10年に、中活法の中に、区画整理事業に「まちなか再生型」という手法ができることになりました。四番町スクエア、彦根市場商店街のような小さな区域であつて、街路事業のような都市計画上の位置づけのないとこ

ろであっても、国の補助事業で区画整理事業ができる、このような制度ができたものですから、真っ先に手を挙げたものでございます。そして、これを組合施行でやろうということになりました。この時組合施行でやるについては、土地の増進があまり見込めない中で、このようなまちなかで経験もなく、しかもこんな小さな区域で区画整理事業をするについては、非常に危ぶまれる声が出ました。全国には、組合施行で出発し、それがなかなか思うように進まない事例が一杯出てまいっております。そのような中で、敢えて組合施行ですということについては、檄の会の活動をしっかりとした成果として残したいという思いが、地元と行政の両方にあったからであります。

元来、彦根は「しっとりとしておちついた歴史のまち」という印象がある反面、変革を好まず新しい考え方を受け入れないという土地柄であり、地域のまちづくり活動はなかなか育たない地でありました。ようやく芽生えてきた檄の会の活動を大切に育て上げ、そしてこれを契機として、他の地域の方や住民の方が積極的にまちづくり活動に参画できるようにしようとの主旨のもとで、敢えて組合施行に踏み切ったものでございます。檄の会の会議の様子はこのような場所で行いました。メンバーは30代後半から40代の方であり、空き店舗の2階に集まってこのような勉強会を週に一度行いました。色々な先生を呼んできて、全国の成功事例の勉強をしている様子であります。

平成11年には、区画整理事業を基本とした全体事業構想がまとまりました。ここでは、あくまでまちづくりをするのだということを基本理念におき、区画整理はまちづくりの手法として用いるのであり、区画整理がすべてではないことを関係者全員が強く意識することにいたしました。「まちのにぎわい」を求めるための事業をする、このような観点での取組としております。檄の会がつくった構想を具現化するための手段として区画整理事業を用いる、それを基盤事業とし、上物整備のためのいろんな事業を組み合わせようというものでございます。その執行機関として、このような組織をつくりました。

左側の区画整理組合は区画整理事業を担当する組織であります。これは区画整理法に縛られることになりません。ところが、檄の会で議論したまちづくり事業というのは、区画整理事業だけに固執せず、まちづくりを完成するためには区画整理事業以外のことにも踏み込まないと駄目だ、ということになって、区画整理組合と並列して右側の共同整備事業組合という別の組織を立ち上げることになりました。これは任意組合であります。ここ

では区画整理事業以外のまちづくり事業に取り組むわけでございますが、その財源につきましては、区画整理事業での建物移転補償費の一部を皆さんが拠出をするというルールをつくり、区画整理組合と共同整備事業組合の両組合の総会で議決をして、このようなシステムができたものでございます。

この共同整備事業組合でございますが、このような4つの下部組織から成り立っております。まず1つ目のまちづくり協定委員会というのは、後ほどもう少し詳しく説明させていただきますが、所謂ルールづくりの場です。次に、にぎわい再生委員会というのは、この地域の商店街組織と共同してイベントを企画し、そして賑わいをつくるための色々なファニチャーや仕掛けづくりをしようというものでございます。テナントオーナー会は、テナントビルを建てるといふ地権者の方が何人かいらっしゃいますが、そのテナントについては組合の方で一定のコントロールをし、そして、組合の眼鏡にかなったようなテナントをそこに入れていこうというものでございます。まち全体として最も賑わいがでるような業種配置を予め設定し、それに見合うようなテナントを組合が窓口になって交渉を進めようというものでございます。

もう一つ、はいから倶楽部でございますが、これは市場女将さんの会でございます。女性の声をまちづくり計画に生かそう、というものでございまして、ここの市場商店街のお客さんは圧倒的に女性の方が多いものですから、檄の会のメンバーの奥さんたちを中心に、女性の声をまちづくり計画に生かして行こうというもので、この組織ができました。ワークショップを中心に女性の声を聞いて、それでにぎわい再生委員会等に反映していこうというものでございます。そして、この中で花づくりをやろうという意見ができました。区画整理事業は単年度ではできません。建物の解体等でユンボが走り回っている中でも商店街の活動は続けていかなければならない、そのために少しでも現場に安らぎをということで、プランターによる花いっぱい運動をこのはいから倶楽部で担当するということになりました。

我々四番町スクエアの事業スキームがこれでございますが、区画整理組合と共同整備事業組合が所謂事業を担当するわけでございます。そして後ほどご紹介しますが、そこには色々な応援団がまちづくりの手助けをいただいております。そして、事業が終わると、今度は管理の時代になってまいります。これも後ほどご紹介します株式会社四番町スクエアという三セクの会社組織と、四番町スクエア協同組合という商店街組合、この2つの

団体がまちの管理を担当することになります。まとめる
とこのような組織図となります。

さて、応援団でございますが、まず全国区画整理組合
連合会の理事長である大阪門真市の光亜興産株式会社
の高橋社長に応援をお願いしました。高橋社長のご指導の
基に、共同整備事業組合というシステムであるとか、区
画整理以外の事業ツールであるとか、地権者への取り組
み方等についてお教ををいただいて、門真市の事例を参
考にこのまちに合うような事業展開をすることになりま
した。実際に担当の方を彦根に派遣していただき、実務
の応援もいただいております。

次に、滋賀県立大学の内井庄蔵先生には、まちづくり
協定委員会の専門委員として個々の建物における景観調
整をお願いし、マスターアーキテクトとしてご活躍して
いただくことになりました。この内容も後ほどご紹介いた
します。もうお一人、国際科学振興財団の大橋先生に
つきましては、「脳にやさしいまちづくり」と称して、あ
る種の超高周波音は脳に直接作用し脳が活性化するとい
う研究をされておられる方ですが、これを文科省の事業
によりまちぐるみでその効能を研究する、という活動を
されておられ、四番町スクエアを舞台にそれを行うこと
になりました。これも少し後ほどご紹介いたします。

さて、区画整理事業の換地作業を進めるにあたっては、
ここでの条件として、空き店舗が非常に多くその土地所
有者は自己利用をしない意向の方が多いということがあ
りました。そのような方の土地を一箇所に纏めて、そし
てその集約換地でできた広い土地にこの地域のランドマ
ークになるような大きな中核施設を建てる、このことが
換地作業にあたっての前提条件でありました。また、商
店主の方の中には、少々のお金を出しても広い土地を要
求される方や、逆に土地を減らしても良いから再建築の
ためのお金がほしいとおっしゃる方がおられました。

このような地権者のわがままをできるだけ聞いてあげ
よう、そのため出来るだけの配慮をしていこうというこ
とで、増し換地、減換地、付け保留地、個人間の土地売
買の斡旋等いろんなツールを用いて、非常に複雑なジグ
ソーパズルを何度も繰り返して組み立てました。全員の
100%満足は行かないまでも、全員80%の満足ができる
ような調整をしたつもりです。したがって、必然的に全
てが飛び換地でございます。

徹底した土地利用ヒアリングを何度も繰り返してやり
ましたが、しかし、やはりすんなりとは進みませんでした。
ある方の従前地からの移転に際して、その交渉がいつ
たんこじれますと、芋ずる式に次の移転が遅れてしま
い、全体の事業進捗に支障がでてしまうことがありまし

た。実は、この事業は、当初は平成16年度に完了する予
定であったのが、1年と数ヶ月延伸ばせざるを得なくなり
ました。従前地から換地先への移転が思うように進まず、
悶々とした厳しい時期もあったのですが、ようやく今年
5月にすべての事業が完了できたものでございます。集
約換地と飛び換地を駆使した換地計画を図示したものが
このシートであります。

次に、もう一つ大きな換地上での特徴は、にぎわい形
成施設としてのパティオと路地であります。まちの中央
部にこのような広場を作って、そしてその広場に放射状
に繋がる路地を作ろうということが、檄の会での議論の
時期に決められました。広場は、国交省になんとか無理
を頼んで区画道路の扱いにさせていただきました。しかし、
路地は3m幅員でございますが、ご承知のように、区画
整理事業は6mの幅員の区画道路が標準でございます、
3mの道は作れません。けれどもここは市場の再生をし
たいということで、市場の再生をするにあたっては対面
商売がしたい、6mの道は広すぎる、3mの道が欲しい、
対面商売をするにはこのような道でないといかんとい
うようなことになりましたので、売り希望の方の土地を3
m幅員でこのような場所に換地をし、共同整備事業組合
がその土地を買い上げ同時に市に寄付をする、市の方は
商店街組合にその管理を任せる、というようなシステム
により「賑わいの路地」ができました。

さて、まちのコンセプトは「大正ロマン」。このよう
にいろんなイメージパースがございますが、100人いれば
100様の大正ロマンがあるということで、ここではでき
るだけ皆さんの我が儘を聞きながら、緩やかな統制をし
ていくことになりました。商店街の方ですので、隣の店
よりうちの店の方が目立つようにしたいというご意向が
非常に強ございます。出来るだけそのことを受け入れて、
全体が緩やかな統制となるように、というようなこと
で、まちづくり協定委員会では応援団の内井先生にそ
の調整をお願いすることになりました。個々の建築のデ
ザイン誘導については、まちの模型を作って調整を進め
ることになりました。

これがまち全体の模型ですが、最初に詳しいヒアリン
グを行い、この場所でこのような商売ならこのような建
物がよろしかろうと、マスターアーキテクトから提案模
型を作ってもらいます。白い模型がそれでありました。次
に、実際の建築にあたって、個人の予算等も加味なが
ら何度か調整会議を行い、その結果、調整が終わって確
定した建築模型は建築主のほうで作成、提案模型と置き
換えることにしました。この色つきの模型が調整後の実
施模型でございます。この作業を繰り返すことにより、

常に一番新しいまち全体の姿が一目で分かるようになり、他の地権者の方にもまちづくりに参画していただけることになったと思っております。まちの模型を前にして、このような会議を何度も繰り返したものでございます。

ここでは、このような協定書をつくっております。これは組合員同士が互いに協定しあうという任意協定ですが、隣の夢京橋キャッスルロードのような都市計画法上の誘導措置ではありません。ここのまちづくりにふさわしい独自のルールをつくって、総会で決めたら直ぐ施行となります。具合が悪くなれば、また総会にかけて変更をすることとし、商店街の現状に即したルールになっています。このことは、非常に機動性があり、そして実効性を伴うというふうなルールづくりができていますと思っております。この協定書には、「福祉のまちづくり基準」と「デザインルールブック」を組み入れており、まち全体の景観が統一され、それがそれほど無理なく管理できるものとなっております。

この写真は、はいから倶楽部の花一杯運動の状況でございます。このような空き地を利用してやっております。

この表は行政の支援事業をまとめたものでございますが、先ほど申しましたように、国交省の事業と経産省の事業を色々組み合わせやっております。因みにこれだけの補助事業を一つの区域で集中してやったというのは、彦根市ではほかにございませぬ。総額が39億3100万円の事業費となっております。余談でございますが、後から後から新しい事業をやることになったものですから、私は助役に怒られております。「騙された、初めは10億で良いと言ってたではないか、蓋を開けてみると市費が20億ぐらいかかっている。もう抜き差しならないようになって、後戻りできないようになってから決裁を持ってくるということは、お前は横着だ。」というふうに怒られました。しかしまあ、このように立派なまちが出来ましたので、まちづくりの成果としてこの税金の使い方は間違っていないのかなというふうにも思っております。

株式会社四番町スクエアはこのような組織でございます。集約換地により生まれた土地に中核施設を建て、それを管理運営する地元のまちづくり会社でございます。この施設は、彦根の食文化を全国に発信することを目的とした施設であります。「ひこね街なかプラザ」は、地域の観光情報や商店街の情報の発信基地となるような施設ですが、このような準公共施設の運営もここで担当することになっております。建設にあたっては、経産省と国交省の補助を並行して使った事業展開となっております。

もう一つ、脳にやさしいまちづくりでございますが、これは、熱帯雨林の森の音や鳥のさえずり、木々のささ

やきであったり、川の音であったり、ある種のそのような音は、人間の耳に聞こえない音域の高周波があつて、それが脳に直接活性化を与えるというふうな研究を国際科学振興財団がされておられます。室内レベルではその効果は実証済ですが、それを地域のまちづくりとしてやっていくということについてはその実績がなく、文科省の事業で実証実験を行うことになり、全国の多くの候補地の中からここ四番町スクエアの地区を舞台に進められることになりました。

平成17年にその実験が終わりましたが、今もその音はずっと鳴り続けております。共同整備事業組合が国際科学振興財団の指導と支援を受けてその事業を担当することになりました。ここでは、世界の何処にもない、音のまちづくりというようなことを運営しております、このことをお客さんを呼ぶ手だて、集客の仕掛けにしていこうとこのまちの方たちは考えています。振興財団の大橋先生の方は、純然たる学術活動の研究対象としてこれを見守っていただける、こういうふうなものでございます。

実は途中で変更した計画というものも、このように一杯ございます。ご紹介する時間がないので、画面だけのご紹介にさせていただきます。

このように、共同整備事業組合でいろんなファニチャー類を道路や公園に作っておりますが、これは地元商店街組合の占有物件として、地元が全てを管理するというシステムになっております。

まちの管理のシートでございますが、このように商店街組合と株式会社四番町スクエアの両方の組織で担当するものでございます。

先ほど申し上げましたが、彦根市の中心市街地人口は激減しております。ところが実は、平成17年から18年にかけての中心市街地の人口は、僅か20人ではございますが、上昇に転じました。この四番町スクエアの活動と先ほど申し上げました夢京橋キャッスルロードのまちづくり活動によるところが大きいと私は思っておりますが、これまでずっと減っていたのが上昇に向かったという結果を私共は非常に重視したいと思っております。私共の中心市街地活性化事業の取組の一つの成果かなというふうにも思っております。

このシートのように、今まちなかでは、色々な市民レベルのまちづくり活動が出るに至りました。財政難により行政のハード事業のほとんどが凍結ということをして市が打ち出したせいもありますが、10年前には全く考えられなかったことであります。やはりここでは、街なか観光を全体目標におき、そして景観を重視し、行政と市民、

地域が目線を合わせて、そしてまちづくり活動を進めていくことが大切だと思います。特に、事業を執行するにあたっては、個人の資産を動かすことになりますので、非常に大きなエネルギーが必要となります。それを実行するためにはまちづくりに対する熱い思いが必要かと思えます。それとそれ以上に、それを貫く強い意志が絶対に必要だな、というふうにも思っております。

そして、街なか観光の話しを先ほどからさせていただいておりますが、それはあくまで観光客のための施設ではなく、対象はあくまで地元として、地域に根付いた施設と位置づけそれを観光客にも開放する、このような視点をもって今後のまちづくりに取り組んで行こう、このことを関係者一同で申し合わせているところでございます。四番町スクエアはこれから管理の時代を迎えます。皆様のご期待に恥じぬよう、今後に対処していきたいと思っております。

本日はこのような機会をお与えいただきまして、大変有り難うございました。失礼いたします。